きえれ百技　下

ヘ4
4857
2

門號 へ 4857
巻 2

嘉壽軒文庫

附録 嵐山三十首

福田圖書

亀の尾の小松ははこむきしにまた
あらし乃山ともちきるぬれかなし
梅津くぬ舟さしくれはあらし山
くるまよりきぬへをくむさかの夕
防らし山雲井のそらにおりこるは

竹下藏書

圖書 昭和十九年三月十日寄贈 氏名 竹下太郎氏寄贈

さかしき人のこゝろなりけるも
峰尾をむれゐても人のきこえけりハ
きか山とひたる斜にや紫る詠
久堅の月のうつるゝの川にうつり
ちはやふる磐の山も見ゆる
浅緑の代やまたのこれるかの春かなん

ちはやふる人をいとひきもなし
大井川ふりしきれをあらふなそ
不二まて白ふ山さくてゝうれ
きうてうれハ松も花なるあらし山
桜と此さくわくおもひ計ふ
大樋のは川ほと柳く永なる

あらしの花ちれいれを見て
何ぞしれぬ人こゝ多くれ満ゝんさく
阿らしのやま乃花をこゝろみる
大ゐのえん川へ氏残家いやしきられ
くきもくわるゝ墓なりし利
あらし山おなれの月影をゆくらみて

渡月一名
御幸橋

よかのかたこそはるかね御らん
あらし山花の旅路にかゝりて
蛙もなかきゑこてん有られ
明ほのゝ花見にくれハ御幸なし
ゆくてこそや月ハこゝろすりぬ
あらし山志つけきくるまの扇そく
芳

そかれ眠のみてもあるかれ
大井川花わおちけこさは小網に
しらくなるまゝに川あらし哉
嵐山におほしつれ神もゆれと

蔵王権現

ちるを先見てゐき花とこそみれ

虚空蔵

星落てなりし佛のこれまれ

有城跡

うなゐるやぬのさくら桃手
あらし山ゆゝふる人のおもひけりしき
花もゝみぢもなき世なり鍬
取くる人見ありけるゆゝし山
青柴しはけき名や立ぬらん
打くちはなれあるしきよ嵐山

秋のみなとはくれもちりけ哉
安らく山木の下やさふ花さなる紀
ふくしろ舟やむねかうたん
大舟うん入江の松をやとりまく
あらしれ霧乃花筏ころうれ
大御舟くさ也おほきさえこのいる八

それのはるかうれ始まるまし
三山舟のり後け花持くなれや
鍾信
きしこ残花ころしら峯の花
うらやまとふらん舟の寄るとも
公任
君おぶのましき紀く八忍び
山かりて舟まつてあらしの吉てふる八

うれてこの名跡なるらん年も
さをしこましらはえあらしやま
とりむかしを志りかほして
きつよろえ花はらきぬ阿らし山
ともみちやなきくそ出あるほし
年をへてあらしぬきえてかけるれと

多くぬとなきの
まれしらいと

高雄山三十首

清麿祠授
護王明神
神号

大空のぬさふりかざすたかの尾山
まつも花さくえだにもみえかな
ゆきしへいくそせふりし高雄山
ゆかりのくやそしたおりつく
あふたい山しきてこうくしぬ志るべくろハ

とか尾の峯はしみち絶らん
槇打あふ手に詣のこゝへるさとり
名ちを尾はそこらく心ふやたえん
高雄山こゝろくるしつまなふかく紅
名にし紅葉幾にはけ嵯りにけり
摩尾山そみちふとつねて孝紫ころ

しつら妻屋て一夜ねふけむ
鎌なかれさの野のくさはゝ千くさゝ
ゆきる名かそれ秋花有なり
名の尾山うその竜てハ雪しかゝ
峯のもとこらにおとされ枕宅
このやまは木まらくなをは天紙の

そめてハくんの名残てらさん
なしとめらも川ゆかさ給く一さつお
高雄のそこさかさ比ら礼
此山ハ御筆のたやし数幾そ
あやしき記ハ注之くも那し
志らぬれよふハゐるやと読人年

本朝盆濫始

納涼坊

三絶鐘銘
菅息是善

序
橘貞相

そもく御法のこえのこえ山
高雄山やまかつ作れハなかる神の
うへにかくしき庵なかりん
霧をへだて注けさも其れ菅原の
そのれおる山てて社つ事
橘れ竜さんきて以く・く山まちる乃

かねてむかし思へハ此ゟ
こし行て千年へぬれと鏡の内に
さやけきものハ名にこそありけれ

書
藤原敏行

世を捨し人ハ孟里にし高雄山
よき妻恋のしるハなくとも

文覚

太山木乃あらしの寒きにこそ

西行
詣文覚

それやさくや花へもりけん
紅葉ふみわけきく私しの声は路の
志るもあしらん人乃むかしを
高雄山ひちを深き霧あれハ
しつハ散る衣うつなり
高尾山うつれきしあさくら織かやの

明恵

一
軒のもみちは先つ染めしきすれ
同しくハ清瀧川に染うけゝく
ふかきの母葵姥ちるゆきてもこん
結むへきいのりもあれは紅葉をそむる
こゝね乃もとらにあらし吹之
峰高く散るや高雄の紅葉ゝ

何のあらしに山おろしそも
咲花といは遠らに紅錦きたる雄山
きのふハ花をあさくけふは紅葉けり
小やまのおく山なれとやける尾乃
槇尾は丹楓見ぬ年もなし
雲折ぬ星や志ふの槇尾山

なれもしらんまた急く社参先
梅尾やふりきの里を見のこし
もえつる秋北祢よてれこれ
名もしらぬ花のみささへて高雄山
松の梢より在明の月
なのをやまちり北にふらんなれかけ

なりとよそく
水清くれ

世の中に山てふやまハ多かれどやの
こゝは抜れたる山をそいふとむかし
吉水の僧正乃よまれたるを
さるもれはなくけりしこのやま
にまさる述懐ハあらしのしきり
ハあれど此やまの字多おほく

くしあるを給りけれおりして難波
の梅津にありしの烟此花の多
言くさの葉百首なんとあまたあり
それよりつきてをとこか旅乃
國の僧某に白山の百首此天
いと此さきしこ見も其一心子

きよくして深なしふるきと集の
名残りにあえおのれも此て
やとおもひ起し事この松乃
良材ともいふへき勇哉此くて此
少と是今之かの勇人嶺之八勇
うへりて百ハまれかん五百首

こゝろばせも夜昼これましうけ
高く志きよかれハ口〻ふみき手
筆の道へきやまもえて哉
うつくしけれ此あらくしき銭
百技にかゝり志思ひ多ハ紀と
まゝ繁なるへくしくしやさん哉

後ゝ覧人のやま口をさくはゝ
ゆるしてこそ弥年
嘉永五年初秋
在聆
しるし

嘉□文庫